
SSS 『short short story』

ICHIWA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SSS 『short short story』

【コード】

N11690

【作者名】

ICHIWA

【あらすじ】

ショートショート

それは短編よりも短い物語

今日はどのような物語が紡がれるのでしょうか

短い物語たちの集う場所

どうぞお楽しみください

第一幕 「胡蝶の夢」

とても素敵なお夢を見た。

それはそれはたくさんの色を使った、色彩豊かな水彩画。軽くぼやけて見えるくらいに朝もやに包まれ、澄み切った空気と晴天の朝。色彩豊かに朝露を転がす花畑の輝く花たち。その中を僕は蝶となってひらひらと舞う。長調のワルツを踊るように、ひらり、ひらりと無差別な曲線をゆつくりと描きながらゆつくりとゆつたりとたまに少しだけ急いでみたり、風の音と葉から落ちる雫の音、他の虫たちが奏でる音楽を頼りに僕は舞う、一人で舞うのは寂しいが傍らにいてもきれいな黒いドレスを纏ったかのような蝶と一緒に舞っている。

僕はただのアゲハチョウ、彼女はきれいなカラスアゲハ。

白の僕と黒の彼女。

白と黒の二つの点は、重なり合っては遠のいて、曲線を描きながら上昇する。それはまるで遺伝子図のような二重螺旋を作り出す。

何も考えず、何者にも邪魔されず。ゆつくりと流れる小さな者たちの優雅なひと時。

それはとても美しく、とても素敵なお夢だった。

とても悲しい夢を見た。

それはそれは灰色に包まれたモノクロの映画。昔見た外国の映画の

ようなレンガ造りの町並みにひっそりと立つひとつのアパート。そのアパートの二階に僕は立っていた。木枠の窓から見える景色はともとても寂れていて、下には大きな街道があり、忙しくなくたくさん人が行きかう。レトロな自動車に乗ったジエントルマンや新聞を配る少年。花を買ってと籠を抱えた少女。煤けた服を着てとぼとぼと歩く老婆。いろいろな人がたくさんの人が入り乱れ、互いを無視し、ただそこにあるものとして関わることの無い世界。

僕は木枠の窓辺に置かれたオルゴールの人形だった。

気づくと一人の髪の長い可愛らしい女の子が近づいてきていた。服も顔も少し薄汚れているけれど、その瞳はともとても澄んだ蒼色をしていた。

彼女は僕を持ち上げると足元に付いているオルゴールの箱に自分で持ち歩いていたのでろうぜんマイを差してカチツカチツと静かにまわす。

一通り回し終わったのだから、彼女は僕を元の位置においてその近くにある木の椅子に腰掛ける。

彼女はずっと僕を見ていた。ポロンツポロンツと鳴る音楽にあわせて僕は同じ軌道をくるくると回る。同じ動きを僕は繰り返す。それはまるでこの世界を表しているかのよう。ただひたすらに同じことを繰り返す。寝るということがゼンマイだとしたならば、この世界の人々はオルゴールの人形。世界という音楽にあわせて同じ軌道を同じ動きを繰り返す。他に干渉せず、干渉されず。壊れるまで続くオルゴール人形。

彼女はそれを飽きずにじっと見つめている。悲しそうな目で愁いを

こめたその瞳で。

僕はひたすら踊り続ける新しい軌道も、新しい踊りも出来ないまま。彼女に新しい世界を見せることはついに出来なかった。

目が覚めると涙が一つ頬を伝う。

起きてしまったのならもう関係ないのに、夢なのだから関係ないのに。

ただ、気になったのはあのカラスアゲハとあの少女。

夢の話なのにどうしてこんなにも恋しいのだろう。悲しいのだろう。

それはきっとそこに僕がいたから。

今ここにいる僕は誰かの見ている夢なのかもしれない。

それこそ僕が夢で見た、アゲハチョウが見ている夢なのかもしれない。

それこそ僕が夢で見た、オルゴール人形が見ている夢なのかもしれない。

薄く光るカーテンの隙間から今日の朝日が差し込む。どうやら今日は晴れらしい。

今日の夜はどのような夢を僕は見るのだろうか。

第二幕 「雨男と長靴の少女」

俺は雨宿りをしていた。

寂れた木造の小さな神社、何を祀っているのかと聞かれても俺にはそんなこと知るすべも無く、知っていることといえば近所の子供たちがこの神社の境内で晴れた日に元気良く遊んでいるということだけ。

普段でも色がくすんでいて朱色とは言い辛い鳥居が薄曇りの灰色の空のせいでさらにひどく見える。

俺はその神社の本殿にある賽銭箱の前の階段に座り込み、空を見上げていた。

「早く雨、あがんねえかな……」

この場所に来る前に少し雨にあてられていたため、濡れたシャツが体に張り付いて体の体温で温められて気持ち悪い。

ザー、と激しい音を立てて降る雨。

その音は様々な音を消し去る。周りには誰もいない。まるでこの世界に俺だけが取り残されてしまったような、はたまた別の世界に俺一人だけ飛ばされてしまったのではないだろうかと思えるくらいの孤独を感じさせる。

雨というのは人を憂鬱にするというが、俺はそうは思っていない。

雨が作り出す無音、孤独、灰色の世界。

それらが人を憂鬱にする。

単調に不協和音の音楽を奏でながら、世界を色あせさせていく雨。

色あせた世界はつまらなそうに俺には見えた。

俺は立ち上がり、一歩二歩と少しだけ前へ進み、降りしきる雨の中でただ空を見上げる。灰色に染まったつまらない空を見上げる。果然と、雨の作り出すノイズも聞こえなくなるくらいに上の空になって。気付くと空が流す涙を自分の涙と重ねていた。

「ねえそこでなにしてるの？たのしい？」

下の方から突然声がして、俺は顔を少しだけ傾けて視線だけをそちらに向ける。そこにあったのは赤い傘。

「たのしいの？」

雨が作り出す無音の中、澄んではいるが綺麗とはかけ離れた可愛らしい声が響く。

「別に楽しくなんて無いさ」

「じゃあなんでそんなことしてるの？」

「さあね」

「へんなの」

俺は視線を空に戻し、また寂れた世界を体全体で感じる。もう、俺の近くにはあの傘を差した子供はいないだろう。面白くもないことに子供が興味をもったりはしないのだから。

雨の流れに身を任せて、ただそこに俺は立つ。それは世界と一体になれるような気がした。

「やっぱりたのしいの？」

俺の傍らにはさっきの子供がまだいるようだった。

「わたしもやってみる」

俺は無言を貫き、その様子を見ることも無く、干渉せずに感じていた。子供はきつと俺のすぐそばにいる。冷たくなった体は思っていた以上に敏感になっていたらしい。すぐそばにいる暖かな子供の体温が空気を通して少し伝わってきていた。

「きもちいいね」

俺はついに声の元に視線を向ける。傘と同じ鮮やかな色をしたレインコートと長靴をはいた少女が俺と同じように上を向いて雨にあたっている。暖かなその赤は俺の目に焼きつくように鮮明に初めてみるかのような新鮮さに俺は見つめていた。

「風引くぞ」

「だいじょうぶだよ、わたしつよいもん」

そこで初めて彼女と視線が合う。世界に一人だけ取り残されてなどいなかった。彼女の声は相変わらず澄んでいて耳に残る。この雨の中、俺は初めて悲しさを苦しさを辛さを寂しさを忘れられることが出来ていた。

寂れた世界の中に一つの暖かい、鮮やかな色をした火が灯っていた。

「これ、たのしいね」

「ああ、そうだな」

俺と少女は灰色の空を見上げて笑う。次第に雨音は小さく、少なくなっていく。周りの木々の葉が雨に揺られる音が聞こえてくる。地面を軽く叩く雨のテンポ良く響く音が聞こえる。様々な雨の作り出す音が耳に入ってくるようになり、世界に再び息吹が吹き込まれ、色を取り戻していくかのようだった。

「おそらがうたってね」

「歌ってるんじゃないさ、奏でてるんだよ」

「かなでてる？」

「そう、奏でてるんだ。地上にあるもの全部を楽器にして」

「そうなんだ」

雨の音がだんだんと弱くなり、聞こえてくる音はピアノシモの協奏曲。静かにけれど終わることなく続いていく。

「あ、おひさまがでてきた」

少女の言葉の通り、雲の隙間から日が差し込み始める。それはまるでオーケストラを照らすスポットライトのよう。

「おそろ、あかるいのに雨やまないね」

「こういう天気を英語でなんていうか知っているか？」

「わかんない」

「天気雨、Liquid Sunshineっていうんだ」

「りきつどさんしゃいん？」

「そう、日本語での別名は狐の嫁入り」

「きつねさんがおよめにいくの？」

「ああ、昔の人はこんな天気の日はそう言っていたらしい」

「よめいり……よめいり……なんかすごいね」

「ああ、そうだな」

冷え切って冷たくなった体に差し込んできた日が当たり、徐々に俺の体を温めていく。雨はまだ降ってはいるがもう、寂れた世界なんてものはそこには存在しない。

「あ、にじだ！」

少女ははしゃいぐようにしてその先を指差す。空には七色の虹が大きく架かっていた。

そしてその虹のある方向には物悲しく立っていたはずの鳥居があったはずなのに、今の鳥居は雨の雫を纏い、太陽の光に照らされて、まるで塗り替えられたばかりのような鮮やかな少女と同じ暖かな朱色をしていた。

火の灯った世界はとても美しいことを知った。

第三幕 「クロックライフ」

チツク、タツク、チツク、タツク。

コツ、コツ、コツ、コツ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

ツツ、ツツ、ツツ、ツツ。

時計の音というものは様々なものがある。一定のリズムを刻み、何があるかと、何をしようとしていようと、時計に干渉しなければ、時計が壊れなければ、数字盤の上でひたすら針を回すだけ。静寂の中の時計は自己主張が激しくなる。

普段は大人しく何もしていなくとも静かにその針を回すだけだというのに。主張した時計の音は嫌でも時の流れを感じさせる。

チツク、タツク、チツク、タツク。

コツ、コツ、コツ、コツ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

ツツ、ツツ、ツツ、ツツ。

部屋の中にはたくさんの時計がある。鳩時計に柱時計、電池で動く壁掛け時計。本当にたくさんの時計があつて、同じテンポで皆、時を刻んでいる。薄暗い部屋の中で時計たちの音楽が聞こえる。

チツク、タツク、チツク、タツク。

コツ、コツ、コツ、コツ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

ツツ、ツツ、ツツ、ツツ。

とつくに飽きてもいいのではないかというくらい長い間、この音楽を聴いてきた。始めは二つの柱時計、次に来たのはちよつとおしやれなカラクリ時計、その次に来たのは、鳩の出ない鳩時計。それからたくさんの時計たちがこの部屋に来た。まるで何かに引き寄せられるかのように集まってくる時計たち。そして同じときを刻んでゆく。

チツク、タツク、チツク、タツク。

コツ、コツ、コツ、コツ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

ツツ、ツツ、ツツ、ツツ。

時計たちの薄暗い部屋に入り、真ん中にある木製のロッキングチェアに座る。時計たちの奏でる音楽に合わせて椅子を揺らし、時の流れに身を任せる。それはまるで時計たちの仲間入りをしたようなそんな気分させた。

時計たちの持つ針は軌道をそれることなく円を描く。柱時計の振り

子のように椅子を揺らす。

チツク、タツク、チツク、タツク。

コツ、コツ、コツ、コツ。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ。

ツツ、ツツ、ツツ、ツツ。

どれくらいの時を過ぎてきたのであろうか。今思つたとあつという間だったように感じる。生きるというかどうかはどういうことなのだろうか。

人間の中にも一つの時計がある。

カチツ。という音とともに柱時計の鳴らす音が部屋の中に響く。

ゴーンッ。

ゴーンッ。

ゴーンッ。

時計たちはその音が響くと、とたんに静かになった。

柱時計の時を告げる音の残響が消えるとともにまた、時計たちの演奏が始まる。

第四幕 「Eye イロとカタチの哲学者」

ここに赤いりんごがあります。つややかな赤色をしたおいしいそうなりんごがあります。

それを見てある人はこう言いました。

「これはこれはおいしそうなあおいりんごだ」

なぜその人は赤いりんごのはずなのにあおいといったのでしょうか。また別の人も同じことを言います。さらにまた別の人も、そうやってたくさんの人に聞いたところこのりんごは赤いのではなくあおいりんごのようなのです。

私はそこで自分の目を疑います。みんながあおいと言うりんごは私には赤く見えるのですから。

ですが私は彼らとは違う世界に住んでいたことを思い出します。

私の世界ではそのりんごの色を赤といいます。ですがこの世界の人たちにとって私たちの赤はあおだということに気付きました。

なので私はいろいろなものを指差していろいろなモノの色を聞いてみることにしました。

晴れた日の空の色を聞いてみます。私からみた空は青でした。

「晴れた日の空の色は赤色ですよ」

次に夜空の色を聞いてみます。私からみた夜空は黒でした。

「夜空の色は白色ですよ」

また、星の色も聞いてみます。私から見た星の色は白色でした。

「星の色は黒色ですよ」

私のいた世界とこの世界では色が逆になっていることに気がきます。とてもとても不思議な感じがしました。

このことを知って私は一つの考えにいたります。同じ色を見ていたとしても、その世界の人々の定義したモノによつて世界の色は決まっているんだと。けれどここでまた、別の疑問が浮かんできました。例えば、同じ場所に立っていたとして私の見ている景色と他の人が見ている景色は同じなのだろうかということなのです。

私の持っている目と他の人が持っている目というのは同じものではありません。一人に一組与えられるモノです。だから、私が私の持っている目で見ているものを他の人が同じように見ているのでしょうか。

それはきっと同じようには見えているのでしょうか。

たとえ目に入ってくる景色が全く違つたとしても、そこにある共通の定義は同じなのですから。

私の目に入っている丸いモノを私の目を通して他の人が見たとします。

そのときもしかしたら、その人は私の目から見た丸いものを四角いものというかもしれません。

ですがその人の目でそのまま、そのモノを見たときは、その人は丸いものというのでしょうか。

その人にとっての四角いモノをその人の目を使って私が見たとき、もしかしたらそれは丸いモノと言うかもしれません。

それはそれでおかしな話と言われても仕方の無いことですが、他の人が見ているものを私も全く同じ形で見ているとは限らないのです。なぜならそれを確認する術は無いのですから。

ここで私が一体何を言っているのかと思う人もいるでしょう。それは仕方の無いことです。

例えば、一つの赤いリンゴがあります。

違う形で見えていたとしても、私たちはそれを見て丸いリンゴだといえます。目に入ってくる形が違ったとしてもそこに共通の定義があるのです。

そして、それは色も同じです。

私にとっての白は他の人にとっての黒で。

私にとっての黒は他の人にとっての白かもしれません。

もし、他の人の目を借りることが出来たのならば、新しい景色が見

えるのかもしねないところ思っわけです。

第五幕 「エッセイ usually, unusually」

私がこうして筆を取ってエッセイを書くのはとても珍しいことである。

自分自身のことについて書くというのは中々に私自身にとっては難しいことであり、苦手なことで、いざ書こうと思ってもいつものような軽快なリズムで筆を進めるということが出来ない。

普段からコンピュータ、私の家庭は一般の家庭と変わらないのでパソコンコンピュータだが、それを使って作品を書いているため筆をとる、という表現は間違っているように思うがとりあえず置いておいていいだろう。

エッセイというものを書いたことがない。というこの一言に尽きる。

私にとっては半分未知の領域であるエッセイを書こうと思ったのはちゃんとした理由がある。

普通とは何か、普通ではないとは何か。

普遍と異常の違い。

これは今までずっと考えてきたことで、ブログの方でも何度か書いた覚えがある。前に書いたときは詩として書いてたため下記に示す。

「普通と異常」

とある一つの事象において普通と異常は一律背反である

俺にとってそれは普通

私にとってそれは異常

人の主観によつて

一つのことやものに

普通と異常という対立したものが同時に存在する

どちらが正しいわけでも

どちらが間違っているわけでもない

交わることがない二つは同時に存在する

日常の中にある非日常

現実の中にある幻想

普通の中にも異常がある

異常とは何か

非日常とは何か

幻想とは何か

それはただ稀なものであっておかしいものではない

ただ稀なだけ

非日常が続けば日常になる

幻想が続けば現実になる

異常が続けば普通になる

何が普通で

何が異常か

この世界において

その判別など

無意味なのかもしれない

このような詩を少し昔に書いたのを覚えている。この詩では異常なもの、非日常的なものが続けばそれが当たり前のもとなることを書いている。

ここでこの詩に何かを加えるとするのであれば、不特定多数の人が普通と認めたのであれば、それが普通でそれ以外は異常となる。それが人間心理的判断。

人間が決めた、世界の定義であると私は考える。

“Usually”と“Unusually”、この二つの言葉は私の作品の共通テーマでもある。

日常の中の非日常。全く正反対で交わることが無いというのは嘘であり、この二つは常に寄り添っている。

いつ、いつもの日常が全く違う日常に変わるのか。入れ替わったとき、そのことに気づいたとき、私たち人間はどのように考え、動くのか。

私はそのことを知りたいと思ひ、表現したいと思ひ小説を書くという行動でその真理を追い求めているのかも知れない。

第六幕 「たった300文字の物語」

300文字の物語。

子供のころ、そんな題名の童話に私は出会いました。

物語に出てくる少年は、姫様を助けることも、世界を救うこともなく。ただ、陽だまりの中で椅子に座り、日常を愛して、平和を愛して、微笑みながら本を読みます。

そんな本を愛する少年の物語。

少年が出てくるのは初めと終わりの300文字。

少年の読んでいる素敵な素敵な物語を想像するよりもその物語たちを読んでいる少年の笑う顔や悲しそうな顔を思い浮かべる私がいました。

物語の最後に少年はこう言います。

「どんなにいい物語でも僕が本当に好きなのはまどろみの中で毎晩のように読み聞かせてもらった物語だな」と。

それがまどろみの中で聞いた。私が今でも愛する物語。

第七幕 「出来損ないのクラウン」

最初はあの子を笑顔にすることが目標だった。

話しかけても答えがなく、絵を描いても興味をしめさず、花をあげても喜ぶことはなかった。

そう、何をしてあげても結局彼女は黙ったままで僕の方をちらりと見るだけ。

あの子はいつも一人ぼっちで、誰とも言葉を交わさず、病院の裏庭にあるベンチでいつも同じ本を読んでいる。その光景がとても綺麗で、僕の目にとまった。ただ、あの子のその横顔はとても寂しそうで、今にも消えてしまいそうな感じがした。

あの子がいる光景が好きになっていき、あの子は僕とは違い笑顔で人を幸せに出来ると思った。

だから、何をしてあげればあの子に興味を持ってもらえるのか、笑顔に出来るのか、僕はそのことだけを考えるようになる。

話しかけ、絵を描いて、花をあげた。

ほかにもたくさんのことをしてあげたけれどあの子が興味を示すことは無かった。

あの子は僕のことを変なやつだと思っているだろう。でも、それでもいいんだ。僕の目標はあの子に笑顔になってもらおうことなのだから。

そうやって毎日毎日、僕はあの子にいろいろなことをしてあげていた。そして、ある日してあげることがなくなってしまった……。

僕は考えた、僕があの子に出来ることは大体全てやってしまったから、次はどうすればいいのかと。

あの子に何かをしてあげられることはなくなったけれど、僕自身があの子に対して何かをすることが見せるといふことが出来ることに気づいた。病院にいる様々な人に話を聴き、教えを受けた。

すごいことは出来なくても簡単な芸なら出来る、そう考えて僕は練習する。

もともと、器用な人間じゃなかった僕は上達することが無かった。

それでも僕は練習して練習してあの子に見せに行く。

あの子は僕をちらりと見るとすぐに本のほうを向いてしまったけれど僕はかまわず覚えたての芸をすることにした。

それはいわゆるジャグリングというやつをやるうと思っただけど、あいにくここにはそんなものが無かったから、僕の手にあるのはおばあさんからもらった小さなお手玉。

「さあさあこれからはじめるのは滑稽な道化師のお手玉ショーです。どうぞ楽しんでみてください」

僕はそういつて一つまた一つと全部で4つのお手玉をテンポ良く投げ大きな輪を作る。

あの子が顔を本に向けたままそつと僕のほうを見ていることに気づいた。

『あつ』

僕とあの子がそろえて声を上げたとき、お手玉はするり軌道を外れ僕の顔に直撃する。

「づぶづぶ」

お手玉は大きな輪の軌道から次々外れてその輪を崩していく、僕はお手玉の直撃の勢いのまま後ろの芝生に倒れこんだ。僕は頭をかきながら上体を起こして顔を赤くしながらへらへら笑ってごまかす。

気づくとあの子は本で少し顔を隠しながらクスクスと笑っていた。

そう、あの子を笑顔にするということはとても簡単なことだった。

あの子は何かをして欲しいわけではなかった、ただ見ていること読んでいることが好きであの子は誰かに対して望むということをしていなかったということ。

僕は今まであの子に何かをあげてばかりしていた。だからあの子はこちらを見てはいたものの笑顔にはならなかったのだ。

「気を取り直してもう一度」

僕はまたお手玉で大きな輪を作ろうとテンポ良く投げようとする。けれどあの子の方に気を取られて全く上手くいかずまた顔に直撃す

る。

「うぶっ」

目の前にいるあの子はまた笑っていた。

そうやって何度か失敗を繰り返していた僕を見かねたのか、あの子は本を静かに閉じて僕に手を差し伸べ初めて声をかけた。

「貸してみて」

あの子の手はとても白く、そして細く、あの子の声はフルートの音色のように大人しく流れるように聞いていて心地が良かった。太陽に照らされたその手はほんのりと光を纏っているかのように、僕は少しばーっと見とれながらあの子にお手玉を渡した。

あの子はそのしなやかな手で器用にお手玉をする。綺麗な輪を作り一定のリズムを刻みながら流れるように回していく。あの子の目はとても穏やかで、口元を少しほころばせ微笑んでいた。

そうして僕はあの子を笑顔にする方法をやっと見つけ、様々な人に芸を聞いては練習しあの子の前で失敗を繰り返す道化をするようになった。

滑稽でいいところでいつも失敗する道化として僕はあり続けた。

失敗するたびにあの子は笑ってくれた。それがとても嬉しくあの子だけの道化としてあったことを嬉しく楽しく思っていた。

それからどれだけたったのか良く覚えていない。あの子が退院する

日がやってくる。

それはわかっていたことだった。様々な人に芸を教えてもらっているときに聞いていた。あの子の病気は精神的なものであり、僕が笑顔にすることでどんどん良くなっていくということ。

別れは辛いけれども僕はあくまでもあの子の道化としてあり続けている。それはもう誇りだった。だから最後まであの子を笑顔にしようと僕は道化を演じる。

「ありがとう、とても楽しかった。時間があるときお見舞いにくるね」

そうあの子は笑顔で言い、僕の前からいなくなった。

観客のいなくなった道化は一体どうすればいいのだろうか、その答えは簡単だ。幕を降ろせばいい。たったそれだけのこと。

僕は無理をしていた。あの子がいる時間、それが僕の辛さを苦しみを忘れられている時間だった。そもそも僕に残された時間は少なかった。けれどあの子のために頑張ること、楽しみを見つけることで喜びを見つけることで僕は生きていられた部分がある。人間という生き物の神秘の一つ。

誰かのために生きた道化への神様からのプレゼントだったのかも知れない。

あの子は何度かお見舞いに来てくれた。その度に僕は道化になってあの子に笑顔を見せてもらう。とても幸せだった。幸せなことだった。

ただ、一度幕を降ろした道化に再びスポットライトが当たることはほとんどない。そのことを象徴するように僕の時間は止まりかけていた。

道化が多くの人に笑顔と素晴らしい時間を与えるように僕もあの子に笑顔と素晴らしい時間をあげることが出来たのだろうか。

そのようなことを考えながら僕の時間は最後のときを刻んでゆく。

そうして何日かが過ぎた頃、もう終わりは見えていて、暗闇の中に僕はいる。その中であの子の震える声があった。

「楽しい時間を、笑顔を、ありがとう。出来損ないの道化師さん」

そうして僕という一人の好きになった人のために生きた道化師の幕は閉じる。

出来損ないの道化師の物語。

第八幕 「恋文の妖」

渡されなかった恋文はどこに行くのだろうか。

誰にも読まれなかったたった一つの恋文はどうなってしまっただろうか。

想いを込めて、想いを乗せて書かれた一つのラブレター。

普通の手紙よりもずっと想いのこもったその手紙は誰の手にも渡らずに捨てられる。

たった一握りの勇気があれば、一歩踏み出す勇気があれば良かったのに……。

その想いのカタチの一つがワタシ。

行き場の無い想いはやがて嫉妬となって、妬みとなって、後悔となつて歪んでいく。歪んだ想いが作り出したのはかつてのワタシ。

文車妖妃と呼ばれた一つの妖。

ただ、読んで欲しかった。

ただ、渡して欲しかった。

ただ、届いて欲しかった。

ワタシは伝えるだけの存在だったのに、人の想いがモノにカタチを与える。モノに心を与える。それはとても残酷なことであり、その一方で喜びがあるけれどそこにあるのはいつも悲劇。

ワタシは手紙の付喪神。大丈夫、今度はきつと大丈夫。純粹な想いがワタシの胸の中には広がっている。かつてのように歪むことの無いまっすぐな想い。

歪むことの無いもの。

それは“感謝”。

ワタシは九十九神。けして百になることのない存在。ワタシに足りないものがあつたとしてもワタシをつくつた想いは百にも勝る素敵なもの。

ワタシがワタシでいることにこれ以上の喜びがあつただろうか。いや、なかった。

鬼と呼ばれ、モノノ怪と呼ばれ。恐れられたかつてのワタシ。

愛のカタチは変わっていく、恋のカタチも変わっていく。

尊敬のカタチも憧れのカタチも変わっていく。

でも、感謝のカタチはいつになっても変わらない。どこに行っても変わらない。

ワタシを作り上げているこの想いにはたくさんの“感謝”とほんのちよっぴりの恋心。なぜ、届くことがなかったのかはわかつてる。それは届ける必要がなかったから。

届ける必要のない手紙だけど、ワタシがここにいることには意味がある。

ワタシはいつの頃も人の想いのカタチのままに存在する。

強い想いはいつだって歪んでいたけれど、初めは一つの綺麗な想いだった。

強い想いがワタシをつくる。なら、ワタシがこれ以上生まれな世界になればいいと考えたときもあった。

けれどこんな強い想いもあることを教えてくれた。現代　いま
という電子的な手紙の行きかう世界でその重みを失っていた手紙
というワタシのカタチを大切にしてくれた。

現代　いま　だからこそワタシは綺麗なカタチでいられる。

ワタシが人の前に現れるほどの強い想いでつくられてはいないから、人の前には現れることはない。いや、もう現れることが出来るほどの想いのこもった手紙は書かれることはないと思う。

言葉の重みがないこの世界。

言葉の中に想いのなくなった世界でワタシが存在するのは言葉の中に想いを精一杯詰め込んでくれたから。

手紙というカタチを使うとき、それは本当の想いを精一杯伝えるとき。そんな時代になったのだと感じる。

ワタシのもう一つのカタチは本や手紙を運ぶ文車。

だからワタシは届けましょう。

本当の手紙が少ないからこそ、素敵な手紙がたくさんある。

綺麗な想いが歪んでしまう前にワタシはこっそり背中を押します。

それがワタシをつくった手紙の想い。

恋することの素晴らしさを教えてくれたどこかにいるあなたへ

ありがとう。

そして、これから恋をし手紙を渡す全ての人へ

踏み出す勇気と綺麗な想いに祝福を。

第九幕 「夜空のキャンバス」

昔々、とつても昔のこと。

たくさんの人が夜空に絵を描きました。

それは今でも伝わって僕らはその絵を見続けている。

やぎに子馬、ペガサスに鶴。トカゲにくじら。寒空の中でまん丸お月様に並んで輝く点を結んで僕もその絵を探してみる。

夜空のキャンバスに描かれたその絵はどんな絵画よりも有名で、季節によって移り行く。

いつも僕たちの上において輝く星。

夜空のキャンバスに絵を描くための大切な画材。

でも、僕たちはその星たちについてどれほどのことを知っているのだろうか。

電気の消えた広い公園の広場の真ん中。

ちょっと露でしめった芝生の上に僕は寝そべってみる。

空には満点の星空。僕の秘密のキャンバス。点をなぞって線を引き、今日もまた絵を描いていく。

「星ってどうして光ってるんだろう」

そんな言葉が出てくる。理由は知っている。原理は知っている。けれども僕は悩み続ける。

わかっていてもわからないことはあるんだ。

考えながら僕は夜空に手を伸ばす。

真っ直ぐに手を伸ばして、空を掴むように手を握る。届きそうな気がしたんだ、届くはずの無い夜空に。

掴めそうな気がしたんだ、あの星たちを。

だけど、星たちに例え手が届くとしてもそこにはたしてその星はあるのだろうか。

たくさんの人がきつと忘れていくし知らないこと。

僕たちが見ている星の光は、昔のその星の光であるということ。

僕たちが見ている星はもしかしたら、今ではもう無いかもしれない。

そう、僕たちが見ているのは星たちの残した記録の一つ。

僕たちはその星たちの残した光をなぞって絵を描く。

星座と呼ばれる絵を見て、僕も自分だけの星座を描く。

星が座っていた椅子の光を頼りに。

今もどこかの星の光が消えている。そして一つの絵が消えてしまうことがある。

何年、何百年、何千年、何万年。

星たちが座っていた椅子の光を頼りに僕は星に夢を見る。

今日も夜空に星たちの残した光が輝く。

その点を結んで僕は今日も絵を描こう。

第十幕 「Dead Lock City」

交通量の多い大通りの車の騒音と排気ガス。

忙しなく無関心にすれ違う人々の喧騒と気配。

汚れた街に俺はいる。

高層ビルの立ち並ぶ殺風景な街並みを頭一つ分くらい高いビルの屋上から見下ろす。季節は秋だというのには紅葉などといったそんなものなんかありはしない。あるとすれば枯れ逝く木々とコンクリートの森だけだ。自然の風なんてものも感じない。あるのはビルの際間風。優しくなでるなんてことの無いただの強風。

下を向いても上を向いてもあるのは灰色、鼠色。気持ちわるいたらありやしねえ。この街自体が見下ろされることを拒んでるかのよう
に俺に向かって吹く風は今の俺にとってはちょうどいい。

あれを捨て、これを捨て仕分けに仕分けてすべて捨てた今の俺は自由
に吹く風と同じ。向かい風が俺という風をさえぎるくらいしてくれないとつまらない。

この場に立っている意味などそもそも無いがこの風が俺の足を止めている。

「見下ろされるのが嫌か？街 オマエ は」

そう呟いて俺はビルの屋上の淵に座って足をだらんとぶら下げてビルで見えない地平線をたどるように街を見渡す。

コンクリートのビルはこの街を囲う獄壁のようだ。もしあれらが獄壁だとしたならば、この中にいる人間は懲役中の囚人といったところか。

決まった時間におき、決まった時間に働いて、決まった時間に寝る。規則正しい縛られた生活。

「なあ街よ。時間は何のためにあると思う？」

誰も答えちゃくれないのは当たり前だが俺は再び問いかける。

「何のために人間は時間をつくったと思う？」

温かみの無い死んだ風が俺に向かってまた吹いてくる。それは俺をこの場から退けたいという意味のようだ。

「時間は人が自由な時間をつくるためにつくったもんだぜ？それなのになぜそれに縛られなきゃいけないんだ？」

「街 オマエ の時間は死んでいるようだ。繰り返すだけの時間なんてただひっくり返り続けるだけの砂時計。終わったら元に戻しての繰り返し。始めは良くても少ししたら飽きちまうほど単純でつまらない世界だ」

毎日が同じ繰り返しなんてものはつまらない。そして意味の無いもの。実りのある繰り返しならいいが単に繰り返すだけなど無駄だ。

この街自体もう繰り返し、消耗していくことしかできない行き止まりにある。

繰り返すことが幸せなのならそれでもいい。幸せの中にあるのならそれでもいい。

「けどなあ、幸せの先は行き止まりしかねえんだよ。だから、俺は不幸であつたことを幸せに思うぜ。幸せのカタチは似たり寄つたりでいつかの終わりが見えてくる。けどなあ不幸のカタチは様々すぎるんだよ。俺みたいは何もかもを捨てたくなる世界を感じるやつもいれば、絶望してるやつだっている。そこから見出した幸せは行き止まりなんか見えねえほどの小さな幸せから始まるんだ。先が見えないからこそこの世界は面白い」

「先の見えた繰り返す世界に俺は興味なんてわからないね」

小さく見れば多少の変化があつたとしてもそこに気づかなければ無かつたものと同じこと。大きく見ればそんな小さな変化なんて関係など無い。全体から見ればこの街は機械仕掛けのカラクリのように繰り返す時間の中で消耗していく存在でしかない。

ぽつりと空から水滴が俺の手に当たる。また一つまた一つと灰色の街のコンクリートを黒く湿らせていく。

「さて、そろそろ行くか」

俺は立ち上がり、嘆くかのように雨が降る街を見下ろす。

「さよならだ Dead Lock City 行き止まりの街、
、幸せの先に行き着いた街よ」

第十一幕 「かくれんぼ」 隠恋慕

「も〜い〜か〜い？」

「まあ〜ただよ〜」

「もお〜いい〜かあ〜い？」

「も〜い〜よお〜」

昼下がりの公園、子供たちのきゅきゅと遊ぶ声と姿を見ながら暖かい日のあるベンチに座ってゆったりとした雰囲気堪能している。別に何も無くてここにいるわけではない。ちゃんと理由があつてここにいる。

「遅いな……」

俺は時計を見てため息をつく、約束の時間からとつくに30分は過ぎていく。

「ゆうくんみつけー！」

子供たちのはしゃぐ声で昔のことを思い出す。まあ時間を潰すのに少しばかり懐かしむのもいいだろう。あまり考えないようにといいか思い返すほど記憶に鮮明に残っているわけではないから印象に強いことしか残ってないけれど。

あの頃の俺はやんちゃだった。とりあえずやんちゃ。いたずらをしては怒られて、仲間が集まってはくだらないことをしては喜んで楽しんで、小さなことが楽しかったし、毎日が新鮮だったのを覚えている。

ちようど今いる公園で俺たちはよくかくれんぼをしていた。茂みが多くて遊具も少しばかり昔の俺らからしてみれば豪華な感じのアスレチックが多く、隠れるところがとても多かったからというのが理由だった。今じゃ小さいこの公園も昔の俺らにとってはとても広い公園だった。

そこで俺たちは毎日のようにかくれんぼを日が暮れるまでしていた。

『も〜い〜か〜い?』

『ま〜ただよお〜』

『はやくしろよお〜』

『もうちよつとまってよ』

『も〜いいよお〜』

かくれんぼで見つけることだけに俺は絶対の自信があった。隠れることはとても下手だったけれど見つけるという一点においてだけはみんなからも尊敬されていた。だから俺は一番最初に見つける子をいつも決めていた。

『ゆきちゃんみつけ!』

『なんでいつもわたしが一番さいしょなの？』

『だってかくれるの下手なんでもん』

たとえ他のやつらを先に見つけていたとしても俺は彼女を一番最初に見つけるようにしていた。それはなぜかって？野暮なことは聞くんじゃないさ。いつも最初に見つけては同じようなやり取りを繰り返す、何をやっているのかときかれても昔の俺にはその小さなやり取りが嬉しかったんだ。ただ、嬉しかったそれだけで理由は十分だろう。

転勤の多いこの街では当たり前のように毎年誰かが転校していく。いつもぎりぎりになって誰かが転校することを知り、みんなで送り出しては悲しみ、別れを惜しみ、そしていつもの日常に戻っていく。子供の友情はそこまで深いわけではない。そこにあいつがいたことは覚えてるし、楽しかったのも覚えている。どこかに行つて欲しくないなと思いつつも、仕方の無いこととして区切りをつけて、いなくなつたやつがいらない毎日がすぐに当たり前になつていく。

俺がかくれんぼをしなくなつたのは彼女がいなくなつてからだ。

俺がかくれんぼをしていた理由はただ単純に楽しかったから、嬉しかったから。彼女がいなくなつたその日からかくれんぼが楽しくなくなつてしまった。

俺はとんだマセガキだった。根性なしのへたれだった。今もし目の前に昔の俺がいたら説教してやるところだ、本当に。

そうして月日が流れて俺は今ここにいます。彼女のいない生活が当たり前のものとした薄情なやつがここにいます。転校していく彼女の最後の言葉を守ることもしないでただ、昔の俺たちのようにかくれんぼをして遊ぶ子供たちを眺めている。

ふと、俺のいるベンチに少しだけ影が差す。

「すみません、うしろにかくれてもいいですか？」

くりくりな目をしてしっかりと俺を見つめる少女がそこに立っていた。

「おういいぞ、隠れるんならうまく隠れるんだぞ」

「うんっ！」

そうやって女の子は俺のベンチの後ろ側に回ってしゃがんで身を隠す。そういえば彼女もそうだった。自分では気づいてないのか彼女もここにいつも隠れていた。なんで同じ場所に毎度隠れるのか、馬鹿だろとしかいいようがなかったがおかげでいつも簡単に見つけることが出来ていたな。そのことだけには感謝しておこう。

「れんちゃんみっけ！」

俺のほうに頬に絆創膏をつけた、やんちゃそうな男の子がやってきてすぐに俺の後ろに隠れた女の子を見つけてしまう。

「なんでいつもわたしが一番さいしょなの？」

「だってれんちゃん、かくれるの下手なんだもん」

目の前の子供たちと昔の俺たちとが重なって見えた。

そうやって日が傾くまで子供たちはかくれんぼをしていた。

結局待ち人は来ず、か。

「ばいばい」

「またあした」

子供たちももう解散するようだったので俺もベンチから立ち上がり、夕日で赤く染まった道を下を向いて歩く。公園から一歩踏み出したところで俺のとは違う影がそこにはあった。

「ひさしぶり」

俺は顔を上げてその影の主をみる。すっかり変わってしまったが雰囲気は昔のままの彼女がそこいたっていた。

「ひさしぶりってどれだけ待ったと思ってんだよ？」

「ごめんごめん、やっぱりこの町も昔とはだいぶ変わっちゃったね。

あ、君は変わってないみたいだけど」

「そっちもあんまり変わってないな」

笑った彼女の顔は昔のままだった。

「ねえねえ、あっち見てみな」

彼女の指差す方向に俺は顔を向ける。

「昔の私たちみたいだね」

朱く染まる道に長く伸びる二つの子供の影。その影はしっかりと手をつないでいた。

その子供たちを見ながら微笑む彼女を見て俺は小さくため息をつく。

「やっと見つけられたな」

「ん？どうかした？」

「いや、なんでもないさ」

俺が一人で続けていた隠恋慕がやっと終わったと、そんな気がした。

第十二幕 「欠落 く仮面の国」

俺は一人、月明かりの差し込む薄暗く家具が少なく生活感のない殺風景な部屋の中で鏡を見ていた。

鏡に映っているのは目頭と目じりが下げて弧を描くように細められた眼と、口の両端を上げ軽く口の開けて笑っている気味野悪い白と黒の仮面。

感情の無いその顔を俺は仮面を通して鏡越しにじっと見ていた。

ここにあるのは感情の欠落した人間の住む国。

感情が欠落すると感性も欠落する。それは個性の死、可能性の死、未来の死。

いろんなものが死んだ世界がそこにあつた。

この世界にあるのは規律と秩序。争いの無い世界。永遠の平和。

仮面の着用は義務であり、責務であり、絶対であつた。これを破ると殺されてしまうことを知っている。

一度だけ、街の中で仮面を外した人を見たことがある。彼は発狂していた。狂っていた。仮面をつけた人々を蔑み、笑い、泣いていた。何かを叫んでいたが良く聞こえなかつた。ただ、赤黒い液体が胸の辺りから飛び、彼の持っていた白い仮面を赤く染まっっていく光景を鮮明に覚えている。

誰も叫ばなかった。誰も嘆くことは無かった。彼を囲う仮面の人々は無感情にじつと気味野悪い笑みを浮かべていた。

仮面を外した彼の最後の顔が心のそこから笑みだったことが俺の中に何かを生んだ。

それは世界への疑問。

それは国への疑問。

それは全てへの疑問。

この仮面は俺たち人間に何を与えたのか。それは平等、秩序、平和、規律。

誰もが望んだ世界がここにはあった。だが、その代償として何を失ったのだろうか。俺が学校で習ったのは戦争と秩序の乱れた人間の醜い歴史。けれど本当にそれだけだったのだろうか。

俺は個性を否定した世界を当たり前のものとして、個性を殺すことが世界を守っているかと教えられて生きてきた。もちろんそれを疑うことなどしなかった。

この仮面は何を隠している？

人間の感情を隠し、個性を隠し、ほかに何を隠している？

人が争ったのは自分に無いものを求めた結果だということを知った。それは個性があり、感情があり、人を羨み妬み奪おうとした結果だったと聞く。それはとても醜いものだと言った。だが、それほどま

で人を狂わせるまでのものを持っていたということにはわかる。争いが醜かろうとそこに人々が欲するほどの美しいもの憧れるものがそこにはあった。

仮面をつけることで人はそれを見ないようにした。それとともに自分の醜い心まで隠し、かつて人を狂わせたであろう美しいところも一緒に隠してしまった。

この国の人々は恐れていることを隠している。自分の悪いところが見られることを怖がっているのだ。人に羨まれることを妬まれることを恐れているのだ。

人は欠落していることが当たり前であるのだと習った。だからその欠落を補うために秩序と規律があり、争いにならないように仮面をつけて感情を殺す。平等であるために……。

俺は鏡の前から離れてベランダへと向かう。

ガラスの戸を開けて静かに外に出る。日が昇ってきたのだろう空はだいぶ明るくなってきていた。

朝日に照らされて街の風景が鮮明に目に入ってくる。

白と黒しかない味気ないモノクロの街が広がっていた。

俺はそっと仮面に手をかけて静かに外す。

昇ってきた太陽の光に目を細めながら俺は世界を見渡した。

第十三幕 「静かな留守番」

朝、家族の声でボクは目がさめた。

「それじゃあ出かけるから留守番頼んだよ」

体をおこしてねぼけた頭で部屋の中をぼけっとみる。部屋のとびらがあいていたので母さんかだれかが先におこしにきてたのだろうか。寝ぼけた頭でボクはへんじをかえず。

「るすばん？」

「昨日言ってたじゃない。みんな今日は用事があったて出かけるって時間無いからもう行くわね」

げんかんの方から大きな声で母さんの声が聞こえてきた。

「いつてらっしやあい」

げんかんのとびらがガチャンとしまる音を聞いてボクはまた、おふとんの中へ。まぶたをとじるとすぐにねむりに落ちていった……。

気持ちのいいねむりの中、とつぜんおなかの上に何か重いものがドシンとふる。

「ふぁあ？何？」

ボクはまたねぼけたままの頭でおなかの上を見ると毛がふわりとまるで黒い大きなセーターの毛玉のようなねこがのっていた。

「ミミ、ふとんの上のっちゃダメだよ」

ボクは起き上がってまだおさない顔つきのコネコをだきあげて下へとおろす。

ミミと小さく鳴くとミミはボクの足にすりよって来る。

静かな部屋にコツコツコツという時計の音がひびいていた。

「おなかへったね。ミミ、いくよ」

ボクが歩き出すとミミも後ろからトコトコとついてくる。ボクはミミのはやさにあわせてリビングにむかった。

家の中はどこもかしこも静かで時計の音とボクたちの足音だけがひびく。

リビングに入ると真ん中におかれたテーブルの上におにぎりとメモがおいてあった。

『おなかへったら食べてね』とそこには書かれていた。

ボクがテーブルの横にすわるとミミがひざの上のっかって丸くなる。ちょこんと頭を上げてくりくりした目でボクを見ている。ボクはかるくなでたあとラップでくるまれたおにぎりを持ち、上のほうのラップだけをがして食べる。おにぎりの中身はうめぼしですっぱかった。

ひととおり食べ終わったあとボクたちはテレビをつけてみるけれど、ニュースばかりでつまらなかつたのでテレビを消して一人といっぴきでソファの上でねころんでいた。

いつもならテレビを見ている父さんやお料理や家事をいそがしうにする母さん、いつもうるさいお姉ちゃんがいるから家の中に音がたえないというのに今日はとても静かで、この世界にボクとミミだけのように感じた。

ポタツポタツと音を立てて落ちる水道の水てきの音、コツコツコツという時計の音、ガタガタガタツという風がまどをゆらす音。その一つ一つがボクにさみしさをきょうふをこみ上げさせてくる。

一つの救いがあるとしたならボクの上でゆっくりとおなかを上下させて静かにねむるミミがいるということ。このぬくもりはとても心が落ちついた。

音があるということとはとても当たり前のことだと思っていた。

生活の音。人の声。命の音。

身近であればあるほどにその音が大切なものだったのだということをおぼえてしまう。消えて初めて気づく、安心する音たち。それはそこに大切な人たちがいるということをおしえてくれるから。だから安心できる。

ボクはミミのおなかに手を当てる。すると手からトットットットット
トツという小さな命の音が聞こえた。

ボクとはカタチも大きさもちがうけれど小さくてもしっかりと生き
ている。こんなにも大切な音なのにどうしていつも聞こえないのだ
ろう。

いつもとうぜんのようにある音はこんなにも大切なものなのにどう
していつも聞こえなくなってしまうのだろう。いつも気づくのは消
えてなくなってから。

大事なことはあとになって気づく。

ボクはいつになっても安心できる音たちを覚えていよう大切にしよ
うとそう思った。

そこにある、そこにいるということ。

忘れがちだけどとても大切なこと。

ミミが顔をひよこつと上げボクの上から飛びおりとげんかんの方
に向かっていく。ボクはそのあとに続いた。

そのときガチャっという音とともに家族のみんなの音が聞こえる。

「ただいま」

「おかえりなさい」

ボクとミミは家族を出むかえる。

ボクたちの家にまた、音が広がっていくのを感じた。

ここにはボクの家族がいる。そのことを心のそこから感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1169o/>

SSS 『short short story』

2010年10月9日06時59分発行